# 「プロ」養成所としての小野ゼミ

第 8 期生　中村 梓

小野ゼミでの 2 年間はあまりにも色々なことがあったから，ここには書ききれない。代わりに，小野ゼミに入る前と入った後の自分の変化について，少しだけ，書かせていただく。

2 年生の私。日吉での生活はそこそこ楽しかった。学生団体もバイトも人並みに頑張った。今後も，みんながやる通り「普通」にゼミに入って，「普通」に就職して…そんな風に歳をとっていくんだろうなぁとぼんやりと思っていたし，それに対して不満はなかった。そんな折，小野ゼミの入ゼミイベントに参加した。一応見とくか，程度の軽い気持ちでの参加。しかしそこには，他のどのゼミでも見られない，しゃんとして自信にあふれた先輩方，完成度の高いプログラムや資料，そして，「三田でマーケティングを学ぶのなら，シロウトから脱却してプロになりなさい」とおっしゃった小野先生の姿があった。ゼミ生も先生も紛れもない「プロ」であった。かっこよかった。私もあんな風になりたいと直感的に思った。――そこで私は気付いた。今の自分に不満はないが，満足もしていないかもしれない。何かを極めたこと，「プロ」を目指したことがないから。平均値に到達すればいいやと，「普通」であることに甘えてきたから。

入ゼミイベントでびびっときてから，あっという間に小野ゼミ生となった。それから毎日課題やグループワークに勤しんでいたら, いつのまにか今日という日を迎えて, 卒業エッセイなるものを執筆している。

4 年生の私。少しは「プロ」に近付けただろうか。自分で言うのもおこがましいが，答えはイエスである。ゼミに入りたての頃，「こんなものを本ゼミで発表するのか」とよく 7 期の先輩方に怒鳴られていた。当時は，悪くない内容なのになんで怒られなければいけないの？と思ったが，今では先輩方のように，自分がお説教をする立場になっている。小野ゼミで数々の課題に取り組んでみて気付いたのは，このくらいでいいやと思って考えるのをやめてしまったものと，締切ぎりぎりまでうんうん唸りながら，もっと良くするにはどうすればいいかと考え続けたものでは，完成度も自分の成長度も，まるで違うということであった。

仲間と納得のいくまで議論すること。少しの妥協もしないで，最高のものをつくりあげること。これが「プロ」のすることなんだと，2 年間を通じて実感した。マーケティングのプロになれたかといえばもちろんまだまだであるが，「プロ」になるための気概や姿勢といったものは，自分の知らぬ間に身についてきたのではないだろうか。それは私だけでなく，同期を見ていても，最近三田論を終えた後輩を見ていても，同じように思うことである。こうした「プロ」を育てるという風土や伝統があることこそが，小野ゼミを小野ゼミたらしめる所以なのだろうな，と今思う。

「プロ」を目指すこと，満足のいくまで必死になることが，こんなに楽しいなんて 2 年生の私は知らなかった。ゼミはそれを教えてくれる場所だった。小野ゼミに入って良かった。